

「夢育」とは

『夢育』とは何なのか」と問われれば、「一人ひとりの子どもが、自分の中で「夢」を育みながら、それに挑戦していく経験を通して、「意欲」や「自信」などの「**自分を高める力**」を養っていく教育のこと」ですと、私たちは答えます。

「夢育」では、「夢」を実現するために必要な様々な「**非認知能力^{*1}**」を養っていきませんが、その中で特に大切なものは「意欲」や「自信」を中心とする「**自分を高める力**」だと考えています。

子どもたちは、多様な体験や多くの人との出会いの中で、たとえ小さな「夢」（私たちは、「夢」を「将来就きたい仕事」や「時間のかかる大きな望み」だけでなく、「**今はできないけど、実現したいこと**」であると定義しています。）でも、自ら進んで「**やってみたいな**」「**そうなりたいな**」と思えることを見つめることができれば、その実現に向けて「意欲」を持ったり、その取組が前に進めば、「自信」につながったりします。私たちは、こうした子どもたちの成長を、しっかりと**見取り**、それ

*1 非認知能力は、一言で言えば「点数化できない力」のことであり、2015年 OECD（経済協力開発機構）は、非認知能力を「社会情動的スキル」と名付けその育成の重要性を指摘するなど、これからの時代に欠かせない力として注目されています。

を子どもたちにフィードバックして意識化させていくことで、「意欲」や「自信」などの「**自分を高める力**」をさらに大きく確かなものにしていきたいと考えています。なぜならば、この「意欲」や「自信」などの「**自分を高める力**」は、自ら進んで「学ぼう」とする「**学びの原動力**」になるからです。

世の中にいる積極的に「**学ぼうとしている人の姿**」を思い浮かべてみてください。年齢などには関係ありません。自ら本を開き、人を訪ねて、学ぼうとしている人の姿です。また一方で、若くして前途洋々たる将来があるとしても、「**学ぼうとしない人の姿**」もイメージしてください。周囲からいろんなチャンスを与えられても、いっこうに本気で学ぼうとしない人の姿です。両者の違いは、いったい何なのでしょう。それは、「やってみたいこと」や「そうなりたいこと」などの「**夢**」を持っているかどうかだと私たちは考えます。つまり「**なぜ学ぶのか**」「**学びたいのか**」という理由を持っているか、いないかなのです。

大人は子どもたちに「勉強しなさい」と何度も繰り返して言いますが、多くの場合「**なぜ勉強しなければならないのか**」ということについて、話していません。仮に話していたとしても「今勉強しておかないと、いい学校に入れないよ。いい学校に

行かないといい仕事に就けないよ。」と言うぐらいでしょうか。こうした場合においても、子どもたちは、この大人の言う「いい学校」「いい仕事」の意味を測りかねていますので、答えを与えられたことにはなりません。

「夢」(やってみたいこと)を持たずに、「勉強しろ」と言われるのは、ゴールを示さずに長距離走を「ただ走れ」と言われているようなものです。それでも、子どもたちが一生懸命に走るのは、保護者や先生たちが言うんだから、「たぶん間違っていないのだろう」という信頼があるから、または叱られるからやむを得ず、です。けれども、それは長距離を走り続ける「**学びの原動力**」としては、長くはもたない外発的動機付けです。ましてや、一生「**学び**」の連続と言われる今日、自分自身の中に、強い「**学びの原動力**」となるエンジンを持つ必要があります。その「**学びの原動力**」こそが「**夢**」であり、「**夢**」を育み、「**夢**」に挑戦することの大切さはそこにあるのです。

「**夢**」は、「将来就きたい仕事」や「時間のかかる大きな望み」だけでなく、「**今はできないけど、実現したいこと**」であると言いました。「小さなこと」から始めてもいいのです。人によって、「**夢**」の大きさやかかる時間は違います。そして、

その「夢」に挑戦していく過程で、失敗や挫折も含めて様々な経験を積んでいくことにより、あるいは多くの尊敬すべき人々との出会いにより、少しずつ「夢」が変わっていくこともあります。私たちは、それは決して悪いことではないと考えています。その時点、その時点において、自分の進んでいく人生の方向性を少しずつ修正しながら、自分の「夢」に向かっていくエンジンを回し続けていけばいいのだと思います。

その過程においては、「意欲」や「自信」などの「**自分を高める力**」という言葉でまとめられる「非認知能力」に加えて、「忍耐力」や「回復力」などの「**自分と向き合う力**」や「協調性」や「コミュニケーション力」といった「**他者とつながる力**」、さらには、「郷土愛」や「当事者性」などの「**地域とつながる力**」という言葉でまとめられる「非認知能力」も必要になっていきます。

本県では、「意欲」や「自信」などの「**自分を高める力**」を中心に、「**自分と向き合う力**」、「**他者とつながる力**」「**地域とつながる力**」という、4つの言葉でまとめられる「非認知能力」を、「**夢育**」を通して養っていきたいと考えています。こうすることで、「夢」を実現しようとする過程で、たとえ困難に出

会ってもへこたれることなく、様々な人々と力を合わせながら、社会を変えていく取組に主体的に参画できる若者を育成していくことができると考えています。

それこそが、**岡山県教育大綱**に示した**基本目標**である「『心豊かに、たくましく、未来を拓く』人材の育成」を具体的に表した姿であり、この教育大綱や第3次岡山県教育振興基本計画に**育みたい資質能力**として掲げられた3つの柱である「**自立**」、「**共生**」、「**郷土岡山を大切に作る心**」を支える力として先ほどの4つの「**非認知能力**」があると考えています。

◎ **育みたい資質能力の3つの柱とそれを支える「非認知能力」**

「自立」	・・・・・・・・	「自分を高める力」と
		「自分と向き合う力」
「共生」	・・・・・・・・	「他者とつながる力」
「郷土岡山を大切に作る心」	・・・	「地域とつながる力」

それでは、「**夢育**」の中で、どのようにして、こうした「**非認知能力**」を養っていくのでしょうか。まず、保護者や教員などの大人は、子どもたちが自ら進んで「**やってみたいな**」と思える小さな「**夢**」を自分の中に見つけることができるよう、可

能な限り多様な経験ができたり、様々な魅力あふれる人々と出会えるよう支援することが大切だと考えています。そして、子どもたちの、その「**夢**」への挑戦に当たっては、大人は子どもたちの「**伴走者**」として、子どもたちの主体的な取組を理解し、側面から支援することが大切です。

そして、次に、こうした**プロセス**の中で子どもたちが見せる、子どもたちに「**育みたい資質能力**」につながる「**価値ある行動**」を**周囲の大人**が見逃すことなくしっかりと**見取り**、適切に本人に**フィードバック**することで、それを子どもたちに**意識付け**、その**行動**をさらに**強化**していく手助けをすることが大切であると考えています。

例えば「今までは、できない理由をあげてやろうとしなかったけど、新しいことにも自分からどんどん挑戦するようになったね。」と、その「**価値ある行動**」を見逃さず、適切なタイミングで本人に返していくことで、子どもたち自身もそのことを**意識**し、そういう自分にも**もっとなろうと努力**していくと考えています。

こうした大人の「**伴走者**」としての関わりや子どもたち自身が**意識**し**強化**された**行動**により、子どもたちの「**夢**」の実現に必要な「**非認知能力**」をさらに養っていくことができるわけで

す。

この「**伴走者**」は、学校教育では教職員、家庭教育では保護者、社会教育では地域住民や地元企業、つまり、子どもたちの周りの大人すべてが該当すると考えます。すべての大人が、その役割と責任を自覚し、子どもたちの「**夢**」を育めるよう、地域ぐるみで「**夢育**」を進めていくことが大切です。

この「**夢育**」を、**新学習指導要領**との関連で考えてみようと思います。

まず、平成28年12月の**中央教育審議会答申**においては、予測困難な社会の変化に主体的に関わり、感性を豊かに働かせながら、どのような未来を創っていくのか、どのように社会や人生をよりよいものにしていくのかという目的を自ら考え、自らの可能性を発揮し、**よりよい社会と幸福な人生の創り手となる力**を身に付けられるようにすることが重要であること、こうした力は全く新しい力ということではなく学校教育が長年その育成を目指してきた「**生きる力**」であることを改めて捉え直し、学校教育がしっかりとその強みを発揮できるようにしていくことが必要とされました。

これを受けた、今回の**学習指導要領の改訂**では、「社会に開かれた教育課程」の実現が求められ、「**生きる力**」をより具体化し、教育課程全体を通して育成を目指す資質・能力を、「**知**

識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力・人間性等」の3つの柱に整理するとともに、各教科等の目標や内容についても、この3つの柱に基づく再整理が行われました。

ここまで述べてきた「夢育」で育む「非認知能力」は、この3つの柱の中では、主に「学びに向かう力・人間性等」に位置づけられるものであり、学校における教育活動においては、単独でその涵養^{かん}が図られるものではなく、各教科の授業や総合的な学習（探究）の時間の活動、学級活動や学校行事さらには、地域と協働して行う学習活動等の特別活動の中で、「知識・技能」の習得や「思考力・判断力・表現力等」の育成と同時並行的にその涵養^{かん}が図られるものであり、これらを支える重要な力として養われるものでもあります。

したがって、これらの「非認知能力」を育成することは、「知識・技能」の習得や「思考力・判断力・表現力等」の育成にも、相互作用的にプラスの影響を与えると考えています。

一人ひとりの子どもたちの「非認知能力」の成長を見取り、フィードバックする取組は、各教科の授業等においても行われるべきですが、特に、総合的な学習（探究）の時間の活動や学級活動や学校行事等の特別活動を中心に行われる「課題解決型学習（PBL）」を通して、その活動のねらいを明確に整理した上

で、「育みたい資質能力」について、しっかりと見取り、本人にフィードバックが行われることが大切だと考えています。

特に、小・中学校における「ふるさと学習」や高校における「地域学」で進められている「課題解決型学習（PBL）」は、子どもたちの主体性を生かしながら、自ら課題を設定し、その解決に向けての道筋を考えさせる学習であり、自分の「夢」を持ち、その実現に向けて挑戦する「夢育」の取組と大きく重なります。

地域において、多くの人々と関わりながら、主体的な学びを進める、こうした活動を効果的に活用し、「非認知能力」を育成しながら、自分の「夢」（やってみたいこと）を育み、その実現に向けて挑戦する取組を、各学校において、地域との協働を図りながらしっかりと進めていきたいと考えています。